



正宗白鳥全集

第三十卷

雜纂

福武書店



正宗白鳥全集第三十卷

一九八六年十月二十一日 印刷

一九八六年十月三十一日 發行

著者 正宗 白鳥

發行者 福武總一郎

發行所 株式會社 福武書店

東京都千代田區九段南二丁目二八

〒102 電話(〇三) 三〇一三三

振替口座(東京) 六10562

印刷・製本 大日本印刷株式會社

定價 八三〇〇圓

第三十回配本(全三十卷)

(落丁・亂丁本はお取り換え致します)

正宗白鳥全集

第三十卷

監修	井伏鱒二	中村光夫	山本健吉	編集 紅野敏郎	中島河太郎	裝丁 山高登
----	------	------	------	------------	-------	-----------

第三十卷 雜纂 目次

詩

二

イブセンについて

四〇

嘘の世界

三

作家と歌舞伎について
わが二十歳の頃

四一

冬の朝

六

文學生活の六十年

四二

冬の夜

九

世は五月

三

インタビュー・談

四三

これもまことだ

三

古ぼけた羽子板

七

最近の小説壇

四四

講演・放送原稿

三

作家と天分

四六

一葉のたけくらべ

五

始めて小説を書かん
とする人の質問
現代十作家の生活振り

四七

七十周年祝賀會祝辭

六

正宗白鳥氏と思想と
人生觀に就て語る

四八

文藝雜談

八四

日記

一五

自己を語る

一〇

作家に聴く

二二

二十歳の日記抄

一七

「黒い潮」

二七

一週間の日記

一六

『民主』の名で統制

二七

昨日午前の日記

一八

「猫と庄造と二人のをんな」

二八

八月初旬

一九

人間的救ひを求めて

二八

日記より

一九

文學八十年

二三

病中日記

一九

一日の生活記録
——五月八日といふ日——

二〇

アンケート

二五

私の一日

二〇

日記抄

二〇

日記抄

二四

觀劇日記

二六

私の一日
—ホテルの生活— 二七

晩春日記 二八

歸郷日記 二四

某月某日 三三

輕井澤にて
—古い八月の日記から— 三三

最後の日録 三四

病床日誌（正宗つね） 二〇

書簡 二四九

補遺 三九

小説

汽車の響 三四一

これから 三四四

ピアノ 三八八

マツチ 三九〇

珈琲店の女 三九三

評論

短評

四二

短評

四二

大舉傳道

四〇〇

新聞記者の見た

四二三

諸學校卒業生に告ぐ

四〇一

印象せる三篇

四二四

紛々集

四〇二

選評に就いて

四二四

繪畫と他の藝術

四〇三

「學生郷里の景勝」評

四二四

文藝所感

四〇四

展覽會を一瞥して

四二五

隨感錄

四〇五

選評雜感

四二六

今月の雜誌と書物

四〇六

最近讀んだもの

四二七

新著批評

四〇七

九月の創作

四二九

應募者へ

四〇七

生きてゐる小平次

四三五

短評

四〇八

世を見をさめの櫻

四三六

短評

四一〇

新聞批判

四三八

ループルの名畫六つ

四三

生成言

四四九

新進作家に與ふ

四三

生成言

四四九

近世日本の一縮圖

四四

不眠で長生

四五〇

隨筆

人生旅行

四五〇

一本櫻

四五

翻譯

子を産んだ女の強味

四九

蓮の花

四五三

一日一信

四四二

少樂師

四五六

雲の美、夕日の美

四四二

驚奇談

四六二

我善坊より

四四三

十九世紀の米國文學概觀

四六八

雜感

四四六

世界の名畫

四七二

あらくれ會

四四九

海賊船

四七九

過誤の喜劇

四六七

出獄人保護館

五〇〇

插畫畫家

五〇五

トルスト尹の沙翁論

五二

巴里人の酒癖

五三

建築と彫刻

五六

解題

中島河太郎

五五

附録

五一

年譜

中島河太郎

五三

作品目録

中島河太郎

五五

著書目録

六三

本全集目録

七〇

凡例

七三

收録作品總索引

八八

詩

嘘の世界

——永遠の嘘の世界——

鐘が鳴る——。

上野の鐘か、浅草か。

湖上に響く三井寺の鐘の音か。

笛の音聞こゆ。

足柄山の笛の音か。五條の橋の笛の音か。

須磨の浦曲の風にもまろゝ笛の音か。

美しき歌聲聞こゆ。

梅をかざした公達の朗詠か。馬子唄か。舟唄か。

戀に狂うたお夏の唄か。

耳を澄ましてよく聞くと、怪しむべし、不思議なり。

わが聞く鐘は、笛の音は、昔の世より聞き馴れし笛の

音ならず、鐘の音ならず、

歌の調子も聲柄も、わが聞き馴れしものならず、我等の祖先の聞き馴れしものにもなし。

聞けば聞くほど、今聞く鐘の音は不思議。ゴンでなしガンでなし、チンでなし、使ひ馴れた日本の假名では現はせないが、餘韻ゆたかなその音は、世界の果てまでも、聞いてゐるわが心を誘ふなり。

笛の音色に似通へど、今聞く笛は、わが聞き馴れしこの世の笛の音にあらず。あはれを誘ひ涙を誘ひ、氣を滅入らせるやうな音にあらず。心も軽く躍り立ち、一切の苦勞消滅の思ひに、わが心浮き立ちぬ。

白樺の森、唐松の林、生物の何かゞそこに踊つてゐる。もやに蔽はれて、さだかには分らねど、人か毛物か、鳥か天使か、何かゞそこに踊つてゐる。

笛に合せ鐘に合せ、歌の調子に合せて、彼等は、面白く楽しく踊つてゐる。

もやに蔽はれ、さだかには見えねども、その踊り振り

は、この世のダンス場に見られるやうな醜怪卑俗のものならず。

「來れ、汝も來れ」

何處からかわれを呼ぶ聲聞こゆれど、わが足逡巡す。われはその群に加るべき者にあらず。

何分か後に、何時間か後に、鐘の音が止んだ。笛の音も、唄聲も止んで、それとともに、かすみの彼方の踊り姿も消え失せた。かすみが消え、もやが晴れ、高原の一面は、光の明るい、靜寂な野となつた。

「日向ぼっこして、うとくと午睡してゐるうちに、かはつた音を聞いたのか。かはつた姿を見たのか」

「おれは晝寢なんかしてゐない。耳も開いてゐた。目も開いてゐた。この目で見たのだ。この耳で聞いたのだ」

「嘘を吐け。戦争以來みんなが嘘ばかり吐いてゐた。

詩にも歌にも嘘ばかり歌つてゐた。孔子の云ふ思ひ邪無しぢやないね」

「おれは邪の無い時に限つて、この地球で聞けさうで

ない唄を聞くのだ。聞けさうでない物の音を聞くのだ。見られさうでない物を見るのだ」

私は私とこんな話をした。私の話相手は私の外にないのだ。

東洋でも西洋でも、南極でも北極でも、地球上では聞けないやうな音楽の聞えるのは、生れながらわれに超人の耳がそなへつけられてゐるためか。われに天才の素質がそなはつてゐるためであるか。星が音楽を奏してゐると、ギリシアの或る哲人は云つた。我耳に響いて來たのはその哲人の聞いた音楽か。

（戀の重荷を肩にかけ、妹がり行けば冬の夜の、川風さむく千鳥鳴く）

星の音楽とはちがつた地上の音楽ではあるけれど、かういふ唄は聞いてゐて面白いではないか。

（羽織かくして袖引き留めて、どうでも主は行かんすかと、云ひつゝ立つて櫺子窓、障子細目に引き開けて、あれ見やしやんせ、この雪に）

こんな下賤な社會で、だらしない服装をしてゐる風貌醜怪な男女を唄つた唄だつて、わが心の耳を蕩かす